

# 織元の特徴ともんぺ

十人十色の久留米絣の工房。約 30 件残る工房はどれも癖と特徴が。約 30 件全て紹介できれば非常に嬉しいのですが、さすがにそれは現時点でありません。このもんぺ博覧会では、その一端でも紹介できればと思います。久留米絣の工房は最盛期は 200 件以上あったと言われてます。さすがにどこも様々な時代を乗り越え残っている個性的な工房ばかりです。今回は、その一端を少しずつ紹介したいと思います。このチラシではざわりとして写真などで、会場ではおそろいももう少しまとまって紹介できるはずなのでお楽しみに。

堅実かつ正確な「久留米絣」をつくり。

しっかりとした絣布を構築する。



野村織物の野村周太郎さん。染場をとりきる。姿勢がいい。

## 野村織物

Nomura Orimono

久留米絣の工房の中では、僕は堅実で非常にしっかりとしたシステムの中で柄が構築されていっている印象がある工房です。工場の中も整っていますし、しっかりと役割分担された工房が切り盛りされています。他の工房はどちらかというと「個人」の印象が強いですが、野村織物さんは「会社」という印象の方が強いです。個人的にこういう布が作りたいという情熱よりも、久留米絣という産業の全体像をしっかり捉えながら、あるべき姿でやるべき事をこつこつと遂行する。次の世代につなげていくためにどういう取り組み、どういう布づくりをすればよいかを考えているような工房だと思います。柄行きも色もシンプルでありながら飽きかこないものが多いです。柄はピンツと正確にあって「久留米絣」という感じです。自社で図案なども構築するののも特徴の一つかも知れません。最近では博多一風堂の制服に布が使われたり、京都の有名ブランドにも布が使われたり、布づくりにおいて、様々なメーカーやブランド、問屋さんからも信頼が厚い工房です。



色使いや柄も上品なものが多い。



工場は整理整頓しっかりかまっています。

### もんぺ特徴

うなぎの寝床のもんぺの型紙のもの、丸亀織物の型との間くらいの太さのもんぺでしょうか。バランスが良いと思います。



野村織物。心地よい工場だ。



ビームに巻かれた糸たち。



野村周太郎さんと、うなぎの寝床の運送さん。

## 下川織物

Shimogawa Orimono

うなぎの寝床のオリジナルの布を作ってもらっているのは、この下川織物が中心です。下川織物さんの特徴は機台数が多く、無地や縞、チェックなども多く織っているところも特徴です。僕は「久留米絣は柄を構築することももちろんだけど、その着心地に本質があるんじゃないか？」とこの 5 年間ほど考えてきました。なので、柄物を着てもらう前に身につけやすい無地をしっかりと構築しようと考えました。そこで布の質感や糸の種類、織りの構造の変化など様々なチャレンジをしていて、無茶な要望もある程度面白そうだったら対応してくれそうで、生産量もそこそこあるとなったら、下川織物さんしかないんじゃないかと、一緒に布づくりをはじめ今年で 3 年目。コミュニケーションを取りながら一緒に生産をしています。去年取り組んだスターウォーズとのコラボ柄などもやったり、今は渋谷のとあるブランドとのコラボもつくってたりしています。面白プロジェクト続々。



下川織物の下川浩典さん。受け継がれたチャレンジ精神は現在。



綿織に記された文字が柄が面白い。



下川織物 × うなぎの寝床

### もんぺ特徴

うなぎの寝床とのコラボになります。無地・縞絣が多いです。うなぎの寝床の「現代風もんぺ型紙」により構築されたスリムなもんぺです。



7 部丈のもんぺ、かわいい仕立てのもんぺ、津留織物

### もんぺ特徴

デザイナーの古賀円さんと考案した独自の形。長いのと七部があります。

## 津留織物

Tsuru Orimono

津留さんは職人家系です。2 年前突然お父さんが亡くなり僕もびっくりしたのですが、今回少しお父さんとの関係についても伺いました。お父さんは織りを中心に、染場は息子さんである津留政次さんが中心に、野村織物さんが「会社」として対外的に、津留さんの工房は非常に職人的・個人的です。お父さんとのコミュニケーションはあまりなかったようです。僕はある意味こういう関係性に対して「かっこいいなー。なんかこういふ職人的な家系。」というあこがれのようなものがあります。政次さんに話を伺うと「機（はた）のことはよくわかりません。手伝ってくれとおばちゃんがおるけん。」と、「おー、職元なのに！言った！分業職人精神！」と僕は私の中で何故かわくわくしました。やっぱり様々な特性の織元があつてその久留米絣だと思います。機台数が 4 台ととても少ない津留織物さんは生産効率というよりも、色や柄行きで特徴を出しています。小柄の色鮮やかな布達は、若い方々にも非常に人気です。「これはかわいいか。」と思えるものを作りたいし、作ってる。自分がそう思えるものしかねー」と政次さんは言っていました。なんかいいなと思います。布の質感も密度が詰まっていて、さらさらとした風合いの布です。



津留織物の津留政次さん。工場は職人感の強い独特な雰囲気。



くくり糸。



津留織物の反物。



色鮮やかな糸たち。



### もんぺ特徴

1 種類の布しかありません。形はうなぎの寝床の現代風もんぺの型紙でつくった形です。横に伸びるので履きやすいです。



板染をつかった布。文人紙を思わせる柄行き。

火事にも負けない親子。独自のルートを切り開く。



丸亀絣織物、もんぺ特徴

ワイドパンツに近いような形。ちぢみ織りと言われるさらさらとした風通しが良い風合いの生地も丸亀織物さんの特徴です。

## 丸亀絣織物

Marugame Kasuri Orimono

お父さん丸山重徳さんは常に新しいものへのチャレンジ精神を持ったアイデアマン。息子さん丸山重俊さんは服飾の専門学校を卒業し、自ら生地や服のデザインまでこなすという個性的な親子です。2013 年 7 月、なんと工場が火事に合い全焼しました。果敢としつつ「あー、やっこれでやめれる。」とお父さんは心の中でホッとした気持ちもあったようです。しかし、息子さんが工房を復興させ自分のところでしっかりと生地を織りたい！という意気込みが大きくそこからの復活劇。今年になって新しい工場も立ち上がり、徐々に生産に戻って来ているようです。丸亀さんは服屋さんなどに布を卸すことももちろん行いますが、自社で東京にも他の産地のものづくりの職人とともに「匠の箱」という店舗を持っています。使い手に近いところでものづくりをしている工房かもしれません。もんぺ博覧会ももう 6 回目。毎年お父さんの重徳さんに相談するのですが「今年はここんとこはついたらいい。毎年新しかとばつたらんざ、お客さんは飽きるけんね」と毎年自分達でテーマがあり取り組みがあります。それがパッチワークだったり、今年はリバーシブルのもんぺに挑戦したようです。息子さんの重俊さんも「僕は 5 代目ですが、1 代目という気持ちで取り組んでいます」というように、親子共々チャレンジ精神があり独自ルートを切り開いて行っている工房です。



のこぎり屋敷の津留織物の工場。



原色などの技法も使っている、貫がらの柄。

## 宮田織物

Miyata Orimono

「これは久留米絣ではない。」それだけは誤解を招かないようにはっきりと言いたいと思います。これは、技術的な側面と言う久留米絣ではありません。板染という別の技法でつくられた布です。しかし、久留米絣に対するリスベクトと、久留米絣のその先にとつて横方向には伸びがあります。これは小柄の織機ではおそらく表現できない領域で、今後のこの産地の可能性として、そして柄の構築の仕方の可能性として紹介します。宮田織物さんはもともと久留米絣の工房からはじまり、1958 年に着物用の久留米絣の布から広幅の布に変換をとり、今では創業 100 年を超え、布作りから縫製、服のデザインまで自社で一貫生産を行なう会社へと成長しています。広幅へと転換をけてはいますが「久留米絣」の考え方や技法、そして精神などを汲みながら機械による効率化と手作業でしかできないことを融合させ布をつくっていることが伺えます。

「久留米絣ではない。」しかし、その精神は確実に受け継がれている。

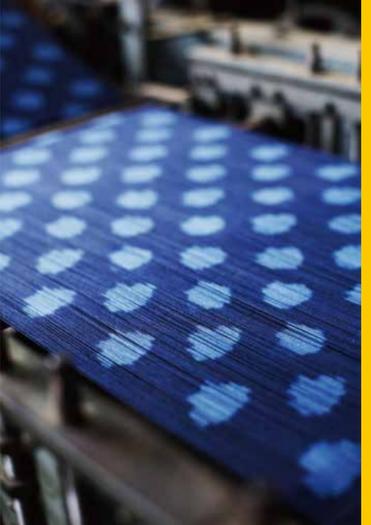


宮田織物の池田さん（左）、原さん（右）。久留米絣ではないけど、リスベクトを持って仕事に取り組み二人。



藍染められた後に叩き整えることで色が定着する。

まだ原色を入れていない藍。美しい。



丁寧な本藍染め、手織りの仕事。所作も含め文化的な価値へと昇華。

### もんぺ特徴

藍染手織は無地になるので柄物はありません。うなぎの寝床の型紙でつくった藍染手織無地のもんぺをつくりました。

## 藍染絣工房

Aizome Kasuri Kobo

なんというか、これは「美しい」です。「きれい」とか「すごい」とかではなく「美しい」です。実は僕が久留米絣に関わるきっかけとなったのはこの藍染絣工房です。妻のいとこがこの職元の 5 代目になる山村健介（通称けんちゃん）です。染場を担当し、染め、絞り、叩きを繰り返し、藍の色を定着させていく様子はよどみなく滑らかに見えていて飽きません。海外の方なども案内することも多いですが、毎回感動して帰られます。藍染は父の山村健さんの代から。ここは手織りの工房であり、ほとんどが経糸、緯糸ともくくって、ぼつちりと柄を合わせていく経緯絣です。「藍染手織経緯絣」これぞ正統的な久留米絣という感じですが、柄などを構築するのはお父さんの健さんの仕事。細かい古典的な模様から大柄のインテリアなどにも使えそうなモダンな柄まで様々な柄があります。藍は徳島の正藍。12 個の藍があり、濃度の薄いものから濃いものまでしっかりと管理されており、薄いから順番に約 30 回以上、染め、絞り、叩きを繰り返し、しっかりと染め上げます。できたての布も素晴らしいですが、藍染めは使っていくと良さがさらに増すものです。はじめは藍の灰汁などがついており、それを着ながら洗っていくことで、白い部分はより白く、藍の部分はより鮮やかになっていきます。これはぜひ体感して欲しいと思います。



藍染工房の 4 代目山村健さん。



藍染手織、しっかりとした経緯絣の反物。